

2009年のおすすめ健康法 日本を元気にするビタミンを 農山漁村体験エコツアーで吸収!



▲四万十組去集合

エコツアー・プロデューサー

壺岐 健一郎

二〇〇九年は丑年、年賀状をはじめいろんな牛たちが目に入ってくることだろう。私の旅には少年時代のセピア色の思い出と同時に、最近旅した中国や東南アジアの農山村で水田を耕す力強い牛の姿が浮かんでくる。過ぎ去った二〇〇八年の干支は、農家の土蔵の住人、鼠だった。竜と虎以外は日本の農山漁村のどこにでも見ることが出来る循環型社会に生きる生物たちだ。人間の生活に直結するところに彼らも生息している。地球温暖化対策に悩みつつ、経済危機に陥り、生きる喜びを失いそうになる人間にとって、救いの手はあるのか?

煮詰まったときは火を止めて、静かに一年を振り返ってみた。エコツアーリズム・プロデューサーを生業とする自分の動きが、随分グリーンツアーリズムに比重が置かれてきたことに気付く。一月、東京都松原村での森林再生活動を紹介します。文化放送ラジオ番組に協力、二月、世界遺産の白川郷での洋風自然学校と歴史を刻む民宿での暮らし体験、三月、栃木で日本屈指のココアファームワイナリー訪問、四月、東京都民の水源地・桐生川源流林植林、

五月、長野県佐久の森植林、六月、四万十町限界集落活性化グリーンツーリズム人材養成、七月、北海道定山溪森林スポーツフェスタ、八月、琵琶湖伝統漁業体験、千葉佐倉・里山のある暮らし体験、九月、高尾山森林マラソン&ノルディックウォーキング、十月、赤城自然塾・炭焼き植林、十一月、波良瀬オーガニックコットン収穫、十二月、千葉大豆収穫。ほとんどのツアーで天ぷら油リサイクルバスを利用し、カーボンオフセットを心がけた。海外でもマレーシア、インドネシア、ニュージーランド、フランス、ドイツ、スウェーデンなどで大都市でのまちづくりと対比して、農山漁村での持続可能なライフスタイルを体験した。



▲新割り共済

前述のほとんどの体験の後の疲労感は、爽快感が吹き飛ばした。飲食の満腹感も、消化のいいオーガニック素材のお陰で、血の巡りを阻害しなかった。贅沢、贅肉とは縁遠い、

スッキリした生活ができるようになった。それが元気の源かもしれない。

丑年のライフスタイルは農耕牛のいる風景の中に身をおいて、食物の国内自給を応援しつつ、自分自身でもできることをしてみよう。そこには最強のビタミンが蓄積されているはず。信頼できる人々が作ったものに、きちんと支払って、しっかり応援して、美味しく食べて、しっかりスポーツして、ささやかな幸福感をシェアしていければと願う。

新宿御苑を一望できる事務所に移転したのは二〇〇八年五月。ニューヨークのセントラルパークを連想する景色に魅了された。いい環境はビタミンをどんどん産み出してくれる。だから生業を頑張る。持続可能な社会の一員として価値観を共有できる仲間、顧客、家族と進んでいければ……と願う。たとえ牛歩のようなスピードであっても。



壺岐 健一郎 二〇〇〇年、有限会社リボンを設立。エコツアーリズム・ネットワーキング・ジャパン代表理事。NPO「ニューフェイス・ジャパン」理事を務める。

2009年のおすすめ健康法 日本を元気にするビタミンを 農山漁村体験エコツアーで吸収!



▲四万十組去集會

エコファーマー・プロデューサー

壺岐 健一郎

二〇〇九年は丑年、年賀状をはじめいろんな牛たちが目に入ってくることだろう。私の最近旅した中国や東南アジアの農山村で水田を耕す力強い牛の姿が浮かんでくる。過ぎ去った二〇〇八年の干支は、農家の土蔵の住人、鼠だった。竜と虎以外は日本の農山漁村のどこにでも見ることが出来る循環型社会に生きる生物たちだ。人間の生活に直結するところに彼らも生息している。地球温暖化対策に悩みつつ、経済危機に陥り、生きる喜びを失いそうになる人間にとって、救いの手はあるのか?

煮詰まったときは火を止めて、静かに一年を振り返ってみよう。エコファーマー・プロデューサーを生業とする自分の動きが、随分グリーンツーリズムに比重が置かれてきたことに気付く。一月、東京都松原村での森林再生活動を紹介する文化放送ラジオ番組に協力、二月、世界遺産の白川郷での洋風自然学校と歴史を刻む民宿での暮らし体験、三月、栃木で日本屈指のココアファームワイナリー訪問、四月、東京都民の水源地・桐生川源流林植林、

五月、長野県佐久の森植林、六月、四万十町限界集落活性化グリーンツーリズム人材養成、七月、北海道定山溪森林スポーツフェスタ、八月、琵琶湖伝統漁業体験、千葉佐倉・里山のある暮らし体験、九月、高尾山森林マラソン&ノルディックウォーキング、十月、赤城自然塾・炭焼き植林、十一月、渡良瀬オーガニックコットン収穫、十二月、千葉大豆収穫。ほとんどのツアーで天ぷら油リサイクルバスを利用し、カーボンオフセットを心がけた。海外でもマレーシア、インドネシア、ニュージーランド、フランス、ドイツ、スウェーデンなどで大都市でのまちづくりと対比して、農山漁村での持続可能なライフスタイルを体験した。

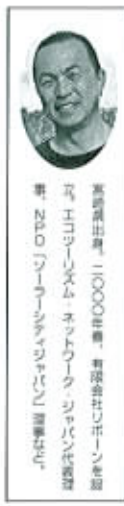


▲新割り共済

前述のほとんどの体験の後の疲労感は、爽快感が吹き飛ばした。飲食の満腹感も、消化のいいオーガニック素材のお陰で、血の巡りを阻害しなかった。贅沢、贅肉とは縁遠い、

スッキリした生活ができるようになった。それが元気の源かもしれない。

丑年のライフスタイルは農耕牛のいる風景の中に身をおいて、食物の国内自給を応援しつつ、自分自身でもできることをしてみよう。そこには最強のビタミンが蓄積されているはず。信頼できる人々が作ったものに、きちんと支払って、しっかり応援して、美味しく食べて、しっかりスポーツして、ささやかな幸福感をシェアしていければと願う。新宿御苑を一望できる事務所に移転したのは二〇〇八年五月。ニューヨークのセントラルパークを連想する景色に魅了された。いい環境はビタミンをどんどん産み出してくれる。だから生業を頑張る。持続可能な社会の一員として価値観を共有できる仲間、顧客、家族と進んでいければ……と願う。たとえ牛歩のようなスピードであっても。



著者 壺岐 健一郎
東京都生まれ、二〇〇〇年移住。有限会社リポーン代表取締役、エコファーマー、ネットワーキングジャパン代表理事。NPO「ソーシャリティ」の理事も務める。